

世界文化遺産となった 本県縄文遺跡における取組み

2021年7月、ユネスコ世界遺産委員会で北海道、青森県、秋田県、岩手県にまたがる17遺跡で構成される「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録された。本県の伊勢堂岱遺跡と大湯環状列石では、遺跡発見当初から地域住民により保全や活用に向けた活動が続けられてきた。遺跡群は4道県に点在しており、今後の誘客については、本県の遺跡が訪問先として積極的に選ばれるような仕組みづくりが必要となるであろう。

1 北海道・北東北の縄文遺跡群

北海道・北東北の縄文遺跡群は秋田県のほか、北海道、青森県、岩手県にまたがる17遺跡で構成されている。縄文遺跡自体は全国に9万か所以上も存在するが、1万年以上にわたり狩猟や採取によって続けてきた縄文人の定住生活の変遷を、同遺跡群だけでたどることができる点などが評価され、2021年7月に世界文化遺産に登録された（図表参照）。


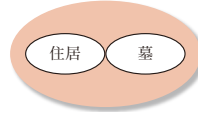



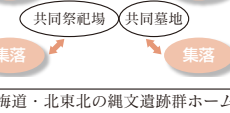
本県に位置する伊勢堂岱遺跡と大湯環状列石は、複数の集落が共同の祭祀場や墓地を形成した時期にあたる遺跡であり、ともにその遺構である環状列石があることを特徴としている。

2 伊勢堂岱遺跡

(1) 遺跡の概要

北秋田市脇神に位置する伊勢堂岱遺跡は全国で唯一、4つもの環状列石がある遺跡であり、1992年に大館能代空港へのアクセス道路建設にともなう調査で発見された。当初は発掘調査後に遺跡を移築する計画であったが、地域住民らから遺跡の保存を求める声が上がったことで、1996年に県が道路の迂回を決定し現地保存されることとなった。その後2001年には、縄文人の世界観や社会構造を復元できる貴重な

図表 集落の変遷と構成資産

ステージ	構成資産
I 定住の開始 紀元前13,000年～ 居住地の形成 	○大平山元遺跡（青森県）
紀元前7,000年～ 集落の成立 	○垣ノ島遺跡（北海道）
II 定住の発展 紀元前5,000年～ 集落施設の多様化 	○北黄金貝塚（北海道） ○田小屋野貝塚（青森県） ○二ツ森貝塚（青森県）
紀元前3,000年～ 拠点集落の出現 	○三内丸山遺跡（青森県） ○大船遺跡（北海道） ○御所野遺跡（岩手県）
III 定住の成熟 紀元前2,000年～ 共同の祭祀場と墓地の進出 	○入江貝塚（北海道） ○小牧野遺跡（青森県） ○伊勢堂岱遺跡（秋田県） ○大湯環状列石（秋田県）
紀元前1,500年～400年 祭祀場と墓地の分離 	○キウス周堤墓群（北海道） ○大森勝山遺跡（青森県） ○高砂貝塚（北海道） ○亀ヶ岡石器時代遺跡（青森県） ○是川石器時代遺跡（青森県）

資料：北海道・北東北の縄文遺跡群ホームページより当研究所作成

遺跡として国の史跡に指定されている。



伊勢堂岱遺跡(環状列石A)

(2) 地域住民による取組み

現地保存が決まった直後の1997年から同遺跡を盛り上げる活動を続けてきたのが、地域住民らによる「伊勢堂岱遺跡ワーキンググループ」である。現在20名が参加している同グループによる活動には、①遺跡を訪れる方々へのボランティアガイド、②遺跡や縄文文化に関心を持ってもらうとともに、子供たちに体験学習の場を提供することを目的とした「北秋田市縄文まつり(2020・2021年は中止)」の開催、③遺跡周辺にある湯車川の環境を守るために実施しているサケの稚魚の放流などがあり、2018年にはその活動が評価され、秋田県特別表彰を受賞している。また、同遺跡では2015年から、地元の小中学生と高校生によるジュニアボランティアガイドも行われている。

(3) 現状と今後の誘客

2016年にガイダンス施設として開館した「伊勢堂岱縄文館」への入館者は、世界文化遺産登録後、県内からの団体客増加を背景として急増している。コロナ禍前の2019年度に年間8,287人であった入館者数が、今年度は4～9月の6か月ですでに12,201人となっている。

北秋田市教育委員会の榎本剛治氏は今後の誘客に関して、「伊勢堂岱遺跡は大館能代空港、秋田内陸線縄文小ヶ田駅、秋田自動車道伊勢堂岱

ICといった交通機関に近接しており、他県も含めた縄文遺跡群を訪れる際の起点となり得るのではないかと考えている」と語る。来館者のなかには旅行会社の社員の団体も見られ、今後遺跡を巡るツアー商品などが増えることも期待される。



伊勢堂岱縄文館

3 大湯環状列石

(1) 遺跡の概要

鹿角市十和田大湯に位置する大湯環状列石は、万座と野中堂の2つの環状列石を中心とした遺跡である。伊勢堂岱遺跡よりはるか以前の1931年、耕地整理にともなう水路建設中に発見され、今年で90年となる。1951年に国の史跡に指定されたほか、1956年には国の代表的な縄文遺跡として特別史跡に指定されている。



大湯環状列石(万座環状列石)

(2) 地域住民による取組み

遺跡発見当時はまだ文化財を保護する制度も

ないなかで、地元の郷土史家らが「大湯郷土研究会」を発足して遺跡の保護や調査研究に尽力した経緯があり、同遺跡においても発見当初から地域住民による活動が進められている。

現在、同遺跡でガイド活動を行っている市民団体「大湯S Cの会」には約40名の地域住民が所属しており、前身のボランティアガイドの会からあわせて20年近く活動を継続している。また、毎年8月に開催している「ストーンサークル縄文祭(2020・2021年は中止)」は地域住民を中心とする実行委員会が主催しているほか、2つの環状列石の中心を結んだ線が夏至の日没方向と一致していることにちなんで開催されている、夏至の日と同遺跡から夕日を見るイベントも市民団体によるものである。

(3) 現状と今後の誘客

2002年にオープンしたガイダンス施設「大湯ストーンサークル館」の来場者も遺産登録後に増加しており、今年8月の来場者数はコロナ禍前にあたる一昨年の3割増となる5,800人を超えた。同館においても県内からの団体客が増えているという。

鹿角市ではさらなる誘客を目指し、同市内で無形文化遺産に登録されている大日堂舞楽や花輪ばやしなど、地域に集積している歴史的な伝統や遺産を観光資源として活用する「ヘリテージツーリズム」や、調査研究に基づいた縄文時代の食、まつり、暮らしを体験できるプログラムを造成する「大湯環状列石 J O M O N 体感促進事業」などに取り組んでいる。

大湯ストーンサークル館の館長である花ノ木正彦氏は、「遺跡を支えてくださる方々とともに、縄文当時の遺跡の役割として考えられる『人々を結びつける場所』を目指して取り組んでいきたい」としており、今後の誘客については、遺跡群のうち大湯環状列石と三内丸山遺跡の2つ

が、国の史跡のなかでも特に学術上の価値が高いとして特別史跡に指定されていることから、「同遺跡との連携なども検討したい」と語る。



大湯ストーンサークル館

4 おわりに

世界遺産登録の目的は誘客ではないものの、人類共通の遺産となった縄文遺跡群の価値や魅力を次の世代へと継承していくためにも、地域活性化につながる保存活用に取り組んでいくことは重要である。遺産登録後には観光DMOなどにより両遺跡を巡るツアーの実施や遺跡に関連した商品の開発等が行われているほか、地元の事業者も出土品等を模した商品を販売するなど、観光振興に向けた取組みがすでに行われている。今後さらなる誘客をはかり、かつ、その盛り上がりを一過性のものとしなないためには、遺跡周辺の観光施設など一体となった取組みと、遺跡も含めた地域への誘客を支援する住民の裾野を広げる取組みも必要ではないだろうか。

17遺跡一体で集落発展の歴史を知ることができる縄文遺跡群ではあるが、4道県に点在しているため、一度に全ての遺跡を訪れることは難しいと思われる。そのなかで、秋田県内の両遺跡が訪問先として積極的に選ばれるような取組みが展開されることを期待したい。

(阿部 誠二)